



敵討東錦繪

十一

~ 13
4055
8



門 へ 13
號 4055
卷 8

三十



仇討天貞東綿繪實記卷之拾八

目録

一 坂上さかのうえ江戶えどへあそび行く事

一 江戸えど去吏きり浅草あさくさ田村たむら倉くら幸助ゆきすけ方かた面事めんじ

并なほ町まち奉ほう所しよ所しよ一いっ所しよのの事じ

大正十年八月廿九日
寄
本大學出版部 贈

仇討天貞建瑞條寶實記卷之拾八

坂上^{さかのうえ}の^の帝^{みかど}を^を又^{また}江戸^{えど}へ^へ移^{うつ}す事^{こと}

天和二年もくればあやしく三年
の春ともいへしと里遠々新年の
かろとよろこび多ぐみ且年の名北と
むらひたる中^{なか}に田^たむらやみ帝^{みかど}なむら
治^ちみハ六^む年^{ねん}とハ^は年^{ねん}の^のあさ^ある^る事^{こと}も

のこみかして百軒四節を史かせるを
りつて一日もそやしく長せん事
をいのりりるもちろん田畑あのみ
清代慈願ののども奇集り
ていねひみまれとせきりりるま
みらまのの故澤もあくあ人の
るごものせし長とまののこありる
まては光陰はそりれらるるのど

く元日三日の総ひきまのよらや
栄へくらみそや正月もまみり
りれば天守り地守よりて天地
和同しるあ前動はらせらるる
かあひくすなをのよしに
を史ハ一家親類とそどち村中
とまののそ程くは容態して
一巻のののよしりりるる

さてこのれと事去年申る事
のうちにのりあることごとし
これども小江戸が江戸と
あつたことごとく仙臺より
平賀山小江戸表へ出て
よのちそのうち仙臺領の
むらさきとつたことごとく
あつたことごとくあつた
あつたことごとくあつた

このれと事去年申る事
のうちにのりあることごとし
これども小江戸が江戸と
あつたことごとく仙臺より
平賀山小江戸表へ出て
よのちそのうち仙臺領の
むらさきとつたことごとく
あつたことごとくあつた
あつたことごとくあつた

せどらんばあてび古^こに^には^はら^らま^ま—
中^{ちゆう}を^をハ^ハあ^あく^くし^しど^ども^も何^{なに}と^との^の事^{こと}ハ
六^{ろく}帝^{てい}を^を傳^{つた}ど^のの^のハ^ハち^ち也^やつ^つど^のの^の入^いり^りせ
敵^{てき}事^{こと}ハ^ハれ^れバ^バは^はと^とこ^こ—^もと^とは^は海^{うみ}が^がら
ハ^ハあ^あく^くま^まづ^づち^ちを^をこ^こく^く西^{せい}國^{こく}マ^マカ^カく^く
事^{こと}カ^カ—^れバ^バは^はと^とこ^こ—^し西^{せい}が^が—^ま
て^てあ^あく^く—^りら^ら—^これ^れハ^ハ事^{こと}—^ハ
仕^し度^ど—^りら^ら—^これ^れハ^ハ事^{こと}—^ハ
仕^し度^ど—^りら^ら—^これ^れハ^ハ事^{こと}—^ハ

うちおえ^{うちおえ}のは^はの^のり^りあり^りと^と大^{おほ}塔^たが^が
あ^あみ^み—^ぬひ^ひ—^れバ^バは^はと^とこ^こ—^し西^{せい}を^を傳^{つた}
ハ^ハち^ち也^やつ^つど^のの^の—^し西^{せい}の^のの^の
も^もは^はと^とこ^こ—^し西^{せい}の^のの^のの^の西^{せい}國^{こく}新^{しん}
西^{せい}道^{だう}を^をつ^つて^て事^{こと}を^をあ^あと^とり^りや^やら^らま
あ^あど^どが^が敵^{てき}統^{とう}せ^せど^ど—^し西^{せい}を^をあ^あと^とり^りや^やら^らま
せ^せど^ど—^し西^{せい}を^をあ^あと^とり^りや^やら^らま
は^はと^とこ^こ—^し西^{せい}を^をあ^あと^とり^りや^やら^らま
は^はと^とこ^こ—^し西^{せい}を^をあ^あと^とり^りや^やら^らま

くまこなるさむあもあつぐまけりる浅草
馬道田村を幸賜うこせむ百事の
於合もまうーあらぶーとこあ
うちよりそまうせんーせひてこ
事と仕そんぢららあれがあ
りともあこるひ又ハハ事ハいま
年ころあれが百事まをはけ
小次郎が何りうとめりたあ

跡又ああハ日くのたよりも自
中あれがあら事ハハああ
ともつて事と希ー又書
あーはくうま事あれがあ
何も回をうあり道りハ
二千余里まうがん
とよらづま事とつけ何との事ハ
はさーまきづらひー

一家一めんうちうりて急げまいと
夕暮ひーの十又の昔目をあれがむえ
はぐーとあめく別まそ海りらん
かかくて十又日めもありりれが八
とみぬま(ま)げひはなはかやと
とせんころりもしやま江
とさーとぞでららあぞ親親縁者
ハ門とくりーとんざん出立車

中懐とたろー目か度海まー
たゆよとてたのくはまさせぬ名残
とねーとらち中りもせば命一をまか
妻ハ一ととぬりのあひひ又り
ころれしよはま夫のあがき旅海
何れも何れも何れもくわ本
とむりりあそ何とらひさーとあ
とむらとあそ何とらひさーとあ

りるに六部一は八七集の八書が人
中さる一やり目録度門あは
こしとわいあさてうりくるみ
四部をまもるごりのはきせぬ
別は謝あれども人ばよく東海
一處をこけてあけぬ

四部をまもるごりのはきせぬ
別は謝あれども人ばよく東海
一處をこけてあけぬ

兼
西をりてあけぬ

去るどに坂上四部をまもるごりのはきせぬ
倉光少次部江戸あはさるより一處
あまきこしとけとあは天和三癸亥年
正月十日常例四部於中土村と
あまきこしとけとあは天和三癸亥年
江戸漢字馬道田村金幸物あ

高野村に於て奉賜と云ふ所の八位下
女史が同没田村の帝を傳へ給ふ所の
從弟ありて生後百姓をまかすに
其の御も少高ひるどせしは親
うちを御お後して十ヶ年ありど
沙高江戸表より人あるも
の帝ありてゆめてこと十年
少年貢上納のせつものも馬場所

斗旅宿せしも新事もの入も
くんばらひあれはさて江戸
馬場へ山さきやとてその
あきあひしてくはらるが
だんく来のくんとたりあげその
くはらるのほもとけき
なまありてくはらる人
さしきたるおの女房とて

田村屋幸助と名のりくさーくさるが
いふざーいふあきとて百一男子の生
せづんが六席を借か添河白くあり
これにけしちき人ととるる人か
とうのてやーとつのは他事
あくくさーくさるがけく坂とに席
を丈夫のりつて家来八席めし
つもの田村屋幸助かうくさるあり

これに幸助とて肉く文通めて
いさるいさるこーこれに且ハあどろ
き且ハ悦びてPくさるいさるの事向
アしてアは是れ出府ー々々よや別々
かとりー事ありーやまらうひ
あらわ事ありとてとよなき秋
又席なせりどの事不さるる事
ゆへれどろき入りてさうりーあり

ハあまのりの言方右ありまづゆら
くは又日も体息のうしあ後ま
ねよぶべしとれくそまのあく
ゆてるあし長途のほろまをそら
させらるゆるまらや又之日とほら
られバ次身みのどけきままがし
まふとさそと漢字祝音の糸後
の社身ましくくるさくかどうよ控人

むきよまきらげましそハあハをど
知そ江戸へあころまあれがらん
あどのものあづらしそまらま
たゆしひとらぞこれしそくま
目ごとも祝音へさん及れし兼ての
福がひとりの遠をを道途し
てあら秋幸あむらひまがあつて
名氏お府の初りゆたづこのねま

了—南町の町まじり 北條安房も
石谷氏近衛盛房も人として少佐
少月もあつていふは海防とありてあ人
沖波もあつていふは海防のたすけ
解とありていふは中下

そこの文云

乃若書付とんも然上

伊奈備も代官所

常列は方郡お去村

百姓 江戸を交

ト一

一 私代々常列は方郡お去村

名を没お勤るを以て納りぬ

天和元年辛酉年九月廿八日

新築の蓮花院にたひて毎年

恒例の日持身は仕大登若

御上^{うへ}まで由^{よし}仕^し重^{おも} 作^あ事^とらる^るご^ごの
統^あ畏^はき^りり^り係^ける^あが^らし

御上^{うへ}にた^たむ^むり^り由^{よし}苦^く者^{しや}を^をり^りは
他^たの^の申^まり^りれ^れそれ^それ^れあ^あく^くま^まな^な

由^{よし}一^い私^し交^か何^{なに}と^とぞ^ぞれ^れづ^づ日^ひか^か一^い
尸^し度^た取^とち^ちて^てま^まら^らり^りに^に知^ちけ^け候^{こう}

由^{よし}後^ご所^{しよ}一^い少^{せう}れ^れひ^ひて^て由^{よし}り^りん^んに^に候^{こう}ま^ま
と^と有^あり^りお^お尋^たず^ずし^しと^とも^も今^{いま}あ^ある^るて

由^{よし}後^ごお^お一^いれ^れあ^あり^りに^に有^あり^り共^{とも}に^にび

由^{よし}と^とり^り状^{じやう}一^い有^あり^りお^お尋^たず^ずし^し

一^いと^とも^もな^なく^く仇^あ討^うの^の故^ゆも^も由^{よし}り^りん

と^と有^あり^りし^し何^{なに}り^りぞ^ぞと^と仕^し合^あは^はせ

な^なり^り何^{なに}と^とぞ^ぞ由^{よし}苦^く者^{しや}を^をり^りん

新^あ之^の通^と死^し 作^あ事^とら^らる^るご^ごの^の候^{こう}

備^あり^りし^し新^あ之^の通^と死^し 作^あ事^とら^らる^るご^ごの^の候^{こう}

天和三癸亥年正月廿七日

何れも信守を以て代官に

百姓

代官 江戸市を以て

浅草馬道家

諺

幸助

右の歌書幸助同及て江戸市を以て
少條及好女とさし置かれは存ある
白洲へりしおされ少條安房も
ちく一少説つておれせられりる

常州四万那布土村百姓江戸市を以て
とらえ置けりるおれられりる
ちく一少説つておれせられりる
偽討の敵は天下の凶法度ありて
先を遣はせられし私におれりる
けりしとて百捕り出仕おきおれせ
つけらるるありけりるちの福が
ひきかしておれりるそのおれりる

縁がひまげりゆ候とくとおさる人
中魚—このまじハまきよのちる中何事
備前^{びぜん}もよりし中魚—これハ
懐^てりん^まるる—^そま^まい^まり^まて^まと
まじくまじこれハ中魚^{ちゆうぎよ}ありせ付
る^その^まり^まり^ま—ハ^その^まり^まり^まと
よび^まが^ま中^ま魚^まは^まま^まり^まと^まれ^まを
海^{うみ}され^まれ^まれ^まハ^ま中^ま魚^まを^ま入^ま平^{へい}に^まく

—て^まハ^まり^まり^まが^まあ^まき^ま何^まり^まが^まま^ま
仕^し合^あひ^ひま^まな^なか^かわ^わそれ^まれ^ま多^たゆ^ゆも^も先^ま
ど^まり^まて^ま備^び前^{ぜん}も^も極^{ごく}し^ま中^{ちゆう}魚^{ぎよ}あり
こ^まい^まり^ま—^まま^まれ^まよ^よま^まじ^まる^ま候^まも^もま^ま
つ^まぎ^まも^も何^{なに}と^ま右^{みぎ}ハ^ま中^{ちゆう}魚^{ぎよ}た^たづ^まま^ま
—^ま中^{ちゆう}魚^{ぎよ}ま^まな^なか^かわ^わる^まけ^ま美^みと^まめ^まん
が^まま^まれ^まり^まる^まん^まま^まび^まま^まく^また^まび^まり^まて
その^ませ^まり^まま^まじ^まく^まに^ま中^{ちゆう}魚^{ぎよ}—^まと^まま^まに^ま

もとく出仕を思ふがごとくも取上り何
とぞゆき悲をもちて多づのの義
も知んぬ成中りやうも欲とせし
れが安房や殿これときこし
いらぬも神妙なる旅ひのちのむき
なりもあつるがごとく日の夜に免れ
くもさぐぎあり私のたふさうち
はけつしておるるび多づのちけり
おんていさうそこのあうらうつこ
くもさぐぎありとありはは命をま
平やくして難を仕合ありとゆ
れやとあ人回しして馬をの家の
あかひかりや人かたみよらつてびやそ
このうへに夫下されての故討あり
と八番とよのまはれまづ江戸申
と多づのべしと目しとまがくいと

春風亭	柳橋
古例	河内
立	馬談
榎川	集志
叶	御助
交	金屋
柳	在集
自	地

後

仇討天貞東流繪安貞記卷之拾六

目録

一 倉光くらみつ上かみ江戶えど名な服ふく於お八や右みぎ馬ま也なり也なり

めんの事

并 赤坂あかざかへ移うつる事

一 赤坂あかざか下した木き所ところにて服ふく於お平へい馬ま御ご洲しゅう也なり

事

相馬けのちろびとゆりいふち
 ちろりみちをえとてふ
 ちろちものてどりかみへはくろを
 おけるえいけもれいまにぶらうんぶ
 けちとてふちろるあふ
 けにせふいふ
 ちろびとり此人をかやろろ
 たけもれ

二十六年八月

仇討天貞東流繪寶託巻之拾六

倉光少次郎江戸名服於八女つ丹

たひちんのかき

兼存板れうはるあま

愛小倉光少次郎ハ箱巻浦手ゆて高
 人の合をまどうむひその夜ハ箱巻去丹
 と有り腹目ハ旅のほろれあやまち

明日出らんあひと法けを居さるるや
しきへれくせとて——とつり
少次帝一落付られら江戸不案
内あれがよろしく頼りよしとて
風呂もどみ入てその夜のあけ
体も——これ毛居家のあけ中
知らん人なれやうれどもあざと
事もしとて急ぎありさしよひ伯父

彼が民部の牙服部ハ右馬つとく
法人のくくして度事と法とあ居
れがあれく文通——とやうとて
をやくねのひ聖朝ありててひも
とよびこれとら毛居候とて——と
氣もくかかひ——道中とて
とていめありやうとてあれが
毛居とてあやうとて——とて毛居と

こればかり次のものうけとりこれを
主人まじりてこればかりはあつこれ
を多まよふ家名みして下ハ倉光
小次郎と有りこればかりは兄民
新くより兼て中細一ハ倉光
島書が次男秘角の身と有りハ
定めて江戸へおごまよへせらる
次一はさるくこれごとく細一

多りさうなら取らまきハるきはド
あれども他はまおひて喧免と仕
か一人強りやめしるすこれハ
侍のつるまきまきまきねども
親島書が遠くあつてこの
島書も何よりこの秘角をれば
せむしてお應りもまきんと見
ふたのこまきまきそのうへ一たびの

事なればさうさう返事とぞ
りりかやあやも遠慮なればさう
所も返事がよめて二三日のうちり
これよりちぐさごと返事
てさうのとやうにすればさうの返事
さうけさうも返事やう返りてさ次
帝もわれさうなればさう帝さう
さうさうさうさうさうさうさう
のさうち佐父八世も南無阿彌陀佛
なまこ返事なればさうさうさうさ
てなすも右のさうさうさうさう
さう返事さうさうさうさうさう
八世もさうさう返事やうさうさ次帝
めりてさうさうさうさうさうさ
の目もさうのさう人さうさうさ
さうさうさう返事さうさうさ
さうさうさう返事さうさうさ

の居しきことさかき宿所へまゝ
南^{なん}新^{しん}宿^{しゆく}へとちづのりるまほく
もあくたれれれがんせうとせうと
いひれれれが^て自^じ代^{だい}ともさうと
ろく^{ろく}七^{しち}次^じ宿^{しゆく}へ通^とど^どりれが^り宿^{しゆく}
高^{たか}く^く悦^{よろこ}び^び海^{うみ}ま^まう^うと^とん^んげ^げの^のこ^こ
く^くあ^あの^のひ^ひ一^{いつ}さ^さん^ん井^いも^も一^{いつ}り^りあ^あお^おく
く^くま^まあ^あの^のひ^ひ行^ゆく^くて^てひ^ひさ^さし^しま
多^たふ^ふり^り人^{にん}と^とよ^よう^うと^とび^びさ^さも^もお^おく^くや
車^{くるま}の^のま^まを^をた^たぶ^ぶり^りと^とん^ん象^{きやう}深^{しん}の^のま
あ^あの^のて^てあ^あの^のま^まあ^ある^るる^る美^みあ^あつ^つき^きな^なむ
事^{こと}を^をほ^ほむ^むて^て人^{にん}を^をあ^あや^やり^りゆ^ゆむ^む
北^{きた}を^をる^るま^までの^の事^{こと}は^はれ^れあ^あく^くな^なむ^む
傳^{でん}へ^へる^るれ^れが^が年^{ねん}福^{ふく}と^とい^いひ^ひ親^{おや}の^の
ま^まあ^あの^のま^まを^をん^んて^てあ^あの^のま^まを^をん^んて^てあ^あの^のま^ま
世^{あぢ}入^い民^{みん}教^{がう}さ^さる^る白^{はく}り^り世^せを^をめ^めて^て南^{なん}不^ふ

とん戒りのあ途申して病癒相
類の常別迎の温泉入湯い
ちをそとく懐柔はそで還留と
いあ病癒さあそり日教はより
やうくと金使くといあるも所仕
いとわとりいなるも八丈其是を
て病癒のあとの多くあをそ
さぞわいあんざいそとーいそー

て一々年のありもいづらふあ
まりーやとらぬらみ少次帝
そりあくびますとあねのそく
病癒養生のそり入湯代茶礼
そり民教さあよりいなるし
金子はらひとそーああへ出り
少筆あるいあそーいあ
あみ常列いあのそり蓮花院

海用はく〜〜〜
らバ私〜〜〜
〜〜〜書状と〜〜〜
〜〜〜やられだ〜〜〜
使〜〜〜返金〜〜〜
さ〜〜〜その方事か〜〜〜
〜〜〜事ある〜〜〜
て町人のお入も多〜〜〜
借宅〜〜〜そのうち〜〜〜仕官の
らバ仕〜〜〜と親類の〜〜〜
〜〜〜あるせ〜〜〜
あ〜〜〜とよびて〜〜〜
お少次席が〜〜〜
お少次席〜〜〜
むき〜〜〜
まのお入〜〜〜

よりむろり通むべーあんが
ま退し何と佐作どのより西より
合何りしが山親父馬書版の意
意のこゝ南代をぬき通しとこころ
事とんざり何きニ三日のちち又
いたよりしとびーハち坊の懐中
より合るそがー十次帝ゆきか
ー通しとびーと何りらるが

さしとがらくしんあう山帝あれ
どもハち坊が仁心めかんとれも
こびるまじとのしー何りが
まし中るらとろーろらげみや
おがま始てあ徳のあひとあ
ちねよと海とせーんみそね
めてうとむひとりー合子ハ徳あ
海の手るれがまふそくもあ

きり 送^{ぞう}信^{しん} 家^かの 調^{てい}度^どまで
そとそとらへ 松^{まつ}をさど 解^とけて 中^{ちゆう}ぎれに
井^いさりまうらあひ 万^{まん}事^じ日^{にち}何^{なに}も げん
そのひくれが 八^{はち}世^せつか さいり
何^{なに}まー 妙^{めう}来^{らい}くろよー ばげん
ゆへ 八^{はち}世^せつ じようろ び 聖^{せい}日^{にち}音^{おん}流^{りゅう}
と 同^{どう}く 一^{いつ} 密^{みつ}所^{じよ} 妙^{めう}や さいり
らる 少^{せう}以^い希^き 八^{はち}世^せつ 知^ちぶ び 音^{おん}流^{りゅう}

かろ びやの 八^{はち}世^せつ 女^{にょ}席^{せき} 母^ぼ
あ じ ちゆう 夜^やと ちか じ び なる ちゆう
か の じ び さいり 一^{いつ} 念^{ねん}子^しも ちゆう
一^{いつ} 八^{はち}世^せつ 妙^{めう} 一^{いつ} 念^{ねん} 度^ど くる
ま じ 是^{これ}も あ じ 一^{いつ} 念^{ねん} 子^し 一^{いつ} 念^{ねん} 子^し
ちゆう じ び さいり ちか じ び なる ちゆう
一^{いつ} 八^{はち}世^せつ 妙^{めう} 一^{いつ} 念^{ねん} 子^し 一^{いつ} 念^{ねん} 子^し
と ちゆう ち 念^{ねん} 子^し 一^{いつ} 念^{ねん} 子^し 一^{いつ} 念^{ねん} 子^し

水次席一は何れでやなろか家の西で
以ては用事なれば何れか
よびよせられよとやみぞ水次席ハ
ハち席のやうは何れか
と何れか
がていもハち席
水用のせと
ありていもハち席

が事あるがのせら
はなうまが親
つらるればその
い
バ
今
傷
い

きものほぶーまの河まうりき
うまうりーのひまのうまうり
はさりらるまハちち中らるま
はすしーのまがーのま
くれられか合まもてり何ぶが
用とーのまてりーのまてり
せひるま事ありまらるま
うまうりーの合まらるま
まらるま

持集りーの合まらるま
まらるま
これまらるま
合まらるま
はさりらるま
分まらるま
ハちちのまらるま
石まらるま

より極月の雜用於合合をある
つとつとに如く何れははひとさ
しとさやの命する所なり
おのまそのざぬなりなりてふ
百事備うまふくく一日くおの
まをほくしと一紙は淡るありも
たろくそろるるざらやうみとそい
はくまいぬえさげそてとる人

なりと大なりてりてりるみ
もきのごとくみれひの若きらる
るればあらず智遠ひとらる
ソ白きらやてかつてぬ事けう
はあやのちこそ大切なり
南於どののよりもあてい
けあうしあはあまも何と
あがののよもあまもあま

ルル家^ケ来^{ライ}みりしを^ウ名^ナ板^イさしそ
ぞらきこり

仇討天貞東洋繪巻記巻之拾六

作 巻

